

竹久夢二の日本歌曲に関する一考察～本居長世、山田耕筰、中田喜直を中心に～

大阪芸術大学 初等芸術教育学科 特任准教授 山田真由美

本研究の目的は、画家であり詩人である竹久夢二の詩による歌曲について、本居長世、山田耕筰、中田喜直の作品を中心に作品の成立背景や、詩人と作曲家が作品に込めた意図を考察し、演奏解釈の一助とする事である。

研究方法は夢二と作曲家に関する文献等を取り寄せ、入手しづらい資料に関しては国立国会図書館等にて閲覧や複写を行った。他にも夢二の美術展をはじめ、大正時代の文化芸術に関する展覧会にて資料収集につとめた。また演奏家視点の資料を求め、夢二の歌曲の楽譜を編集した声楽家石田徹の書籍やラジオ番組から資料を収集し、歌曲を演奏するにあたって詩人や作曲家からの生の言葉を集めたピアニスト土肥みゆきの著作資料を収集した。

夢二と音楽の関わりについて坂本麻実子（2005）ⁱは夢二が聴覚的感性も鋭かった事、夢二が装丁したセノオ楽譜に関しては美術的立場からの研究は多いが2005年当時音楽出版物としての研究は行われていない事、更に夢二の詩による歌曲の調査、研究も不十分である事を述べている。セノオ楽譜と夢二の関係については越懸澤麻衣『大正時代の音楽文化とセノオ楽譜』（2023）に本居長世や山田耕筰に関する記述もあり大変参考になった。越懸澤は、夢二の詩による最初の作品は本居長世による《蘭燈》で、妹尾はこの曲の成立背景を「私は此の頃少し高級な小唄が世に行はれたらよからうと云う希望から、夢二氏の詩を携へて、渋谷なる本居長世氏をお訪ねしました。処が、本居氏も至極御同感で直に筆を執って此の曲を書いて下さいました」と述べている。

セノオ楽譜 94 番《なみだ》は幸いにも本学図書館に所蔵されており、妹尾は「一般から申しますと、此の歌はやゞ高級かも知れませんが、今の楽界の傾向から見て、あながち易しいものばかりも望めませぬ」等解説している。越懸澤は「高級というのは妹尾にとって一つのキーワードだったと考えられる。妹尾は従来の日本語の「小唄」のレベルに不満を抱いていたふしがあり、セノオ楽譜で質の高い小唄を提供しようと意気込んでいたようだ。」と述べている。妹尾の尽力によって、ピアノ演奏にも長けていた本居長世、歌曲作曲

家としても名高い山田耕筰によって、詩と音楽が一体となった夢二の歌曲が誕生したといえよう。山田耕筰の夢二の詩による歌曲は《なみだ》1曲のみであるが、作品に関して夢二の言葉が残されている貴重な作品である。「かねつね氏ⁱⁱに床の中で逢った。(中略)「涙」を見て山田の曲をほめて学校でやって見るといふことで別れた。月のまん丸い夜だ」ⁱⁱⁱ

《なみだ》も《別れし宵》もピアノパートは単なる伴奏ではなく、歌詞と呼応する表現となっている。例えば《なみだ》では涙がほろりとこぼれるようにアルペジオが使用されており、《別れし宵》では詩の冒頭に登場する「タランテラ」が後奏のピアノで表されている。

中田喜直《風の子供》は歌曲集として初めて出版された《六つの子供の歌》の第3曲であるが最初書き上げられた。この時に組曲の構想が生まれたそうだ。曲はサラバンドのリズムにのせて語られ、巧妙な転調がみられる^{iv}。転調は詩の内容に呼応している。夢二と中田喜直の抒情性が響き合う《風の子供》は中田喜直の日本歌曲デビュー作といえる。

「詩人になりたいと思った。けれど私の詩稿はパンの代わりにはなりませぬでした。ある時私は文字の代わりに絵の形式で詩を画いて見た」^vと書いていた夢二。石田徹は「夢二は壮大なテーマはかかない、大壇上に構えない、その時々些細なこだわり、生きている上で足りないものを素直に打ち明けた。絵よりも無防備な自分をさらけ出した。」^{vi}と語る。

本研究を通して、詩人と作曲家、詩と音楽の結びつきへの興味が深まり演奏解釈の一助となった。今後も研究を続けたい。

ⁱ 音楽史から読む竹久夢二～宵待草とその時代～

ⁱⁱ 兼常清佐（1885～1957）音楽学者、評論家

ⁱⁱⁱ 『夢二日記 2』 p.376

^{iv} 土肥みゆき『中田喜直 歌曲の世界』有限会社アップル印刷社企画部 1988年

^v 竹久夢二『夢二画集 春の巻』洛陽堂 1911年 序文

^{vi} 『私の中の夢二』RSK山陽放送 1983年6月27日放送 日本民間放送連盟賞受賞（第31回教養番組部門優秀賞）放送ライブラリー（横浜）にて聴取